



桂川町の未来にかける想い

桂川町の10年を改めて振り返ると…

やはり合併問題が一番に挙げられますね。すごくデリケートな問題で、どう伝えたらいいのか分かりませんが、現在と当時では全く感覚が違います。

当時、2市8町の合併協議会が立ち上がって、町民の皆さんも役場の職員もそのほとんどが、町の財政状況や様々な要因から、合併は避けては通れない道だという認識で進んでいたいと思います。しかし、一方で「合併だけが道ではないのではない」という意見もあり、最終決定をする場で合併協議会から離脱しようという動きになりました。その後、再び「合併の道に戻ろう」という動きもありましたが、今となっては合併しなかったのか、出来なかったのかさえも分かりません。ただ、

桂川町は、近隣市町と違って単独で町政運営をしなければならなくなった。これは、間違いない事実です。

私も当時は、町の1職員として、また1住民として町が非常に混乱している現実を目の当たりにして、とにかく歯がゆくてしよつがなかったことを覚えています。その現状を「本気でなんとかせなかん」という気持ちから町長選挙に立候補し、今日に至っているわけですが、そういう時期から比べると、町全体の雰囲気もずいぶん変わりましたね。行政と議会の関係にしても、いろいろな議論は当然ありますが、小さい町だからこそしっかり前を向いて行かないかと、同じ方向を向いて歩み出しています。

「小さな町」「コンパクトな町」にも、魅力は当然あります。

それは「人の顔が見える町」ということです。行政を例にすれば、町職員から住民の皆さんの名前と顔が一致する。住民の皆さんから見ても、職員の顔がはきり見える。また「コミュニティを例にとれば、同じ町で生活する住民同士の顔が見える」といった具合です。相互にその関係が築けるといっつのは、これからの高齢化社会や子どもたちの教育、安全安心の町づくりなど様々な場面において、本当に大きなメリットになります。そういったことから、桂川町では、行政・議会・住民による協働のまちづくりを進めていくことが十分に可能だと言えます。

町制施行60年から70年までの10年間は、かつて桂川町で石炭の灯が消えた時同様、町にとって非常に大きな変革の時代だったのではないのでしょうか。